

〈報告〉

短編映画『音を摘む』制作プロジェクトの報告

島田英二*

Production Report for the Short Film “*Plucking the Sounds*”

Eiji SHIMADA*

要旨

北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科、映像表現系ゼミナール（島田英二ゼミ）では、学生主導のプロジェクトとして2023年に短編映画『音を摘む』（19分30秒）を制作した。完成作品は第18回札幌国際短編映画祭に入選し、2023（令和5）年10月に札幌で上映された。本稿は、本プロジェクトの成果について報告する。

Abstract

In 2023, students in Eiji Shimada’s seminar (Faculty of Information Media, Department of Information Media, Hokkaido Information University) produced a short film titled “*Plucking the Sounds*” (19min 30sec). This paper reports details of the film’s production, from development to screening. The completed film was nominated for the 18th Sapporo International Short Film Festival and Market (SSF) and screened in Sapporo in October 2023.

キーワード

映画制作 (Film production) 短編映画 (Short film) 映画演出 (Direction) 映画祭 (Film festival)

* 北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科教授, Professor, Faculty of Information Media, Department of Information Media, HIU

1. はじめに

本プロジェクトは、本学の情報メディア学部情報メディア学科で映像を専門に学ぶ学生が日頃の学びを活かして映像作品を作り映画祭等のコンテストへの入選を目指すものである。参加学生は短編映画の企画開発から、キャスティング、撮影、編集といった映像制作のワークフローに則り映像作品を制作する。成果物は映画祭や映像コンテスト等に応募し、制作者としてコンテストに参加、作品を発表することを目的とする。

2. プリプロダクション

2-1 企画開発

島田ゼミの15期生3年生11名が、短編映画の企画案を出した。初期案は24あり、中には、「ウクライナ侵攻」「新型コロナウイルス」「SNSでの誹謗中傷」といった時事的なキーワードも見られる(表1)。ここから投票によって8つの候補に絞り、さらにディスカッションによって2案(「面(つら)」、「音を摘む」)に絞り込み、最終的には「音を摘む」が選ばれた。時事的な企画は脚本の難しさがあると判断された。ホラーの案が忌避されたこと、またメンバーにミュージシャン志望の学生がいたことから、「音を摘む」ではラストシーンでサンプリング・ミュージックによる見せ場を作れることが評価された。

2-2 脚本執筆

脚本の執筆は希望者2名で競作する形を取った。初期のログラインは以下の通りである。(ログライン)音楽制作に行き詰った自尊心の高い大学生が、才能あふれる人気者だと思っていた相手の裏での努力を目の当たりにし、自身の音楽制作を見直すことで、自分の音楽スタイルを見つけ出す。

このログラインをベースに執筆を開始したが、①主人公が音楽制作に行き詰まった理由、②「自分の音楽スタイル」をどうやって見つけるか、の2点が度々議論となり、改稿を重ね、脚本の完成までに約3ヶ月を要した。最終的な決定稿のあらすじは、以下の通りである。

(あらすじ) 高いピアノの才能を持つ主人公・圭介は幼いころに父親から受けた精神的虐待でピアノから距離を置く生活を送っていた。そんな中、幼馴染の勇剛から着信が入る。

表1 初回企画案一覧

学生	番号	タイトル	内容・企画意図	候補
A	1	太陽の昇る日	「日本の大晦日」「初日の出」私たちからすると平凡だけど他国から見ると珍しい伝統文化、日本の良さを再確認できる	
A	2	エリカ	エリカの花言葉である「孤独」「寂しさ」「博愛」「良い言葉」をモチーフに。	
B	1	真空の薬	いじめにあっていて主人公が「何でも叶う薬」を飲む。学校に1つはあるとされているいじめについて考える	
C	1	檻の中の奇獣は眠る	創作活動が好きな青年が、しがらみをくぐり抜け、自分自身を取り戻しながら成長していく物語。クリエイターを元気づけられる作品を作りたい。クセが強い作品に。	
D	1	音を摘む	主人公は自分だけの音楽を追及するため試行錯誤し、サンプリングという手法に出会う。音と映像がリンクした作品にしたい。	○
D	2	クローゼット	クローゼットの中に誰かいるのではないかと、言う最悪の考えにいきついた男。(冬に屋外で撮影をしたくないから)	○
E	1	友情	とある大学生3人組が連休に泊り小旅行に行くが些細なことで喧嘩に。友情の大切さを伝えたい	○
F	1	世界支配へ	ウクライナ侵攻やSDGsといった問題を解決するために世界支配をしよう、ある団体が立ち上がった。しかし、自己中心的な人間が現れる。こんな今だからこそ世界が協力すべきだということを訴えたい	○
F	2	友達幽霊	ある日主人公が事故物件で、そこで亡くなった霊と遭遇。現代社会のストレスを吐き出せる存在の重要性を伝える。	
F	3	彼女が天然	主人公の彼女が天然過ぎて毎日……。この時暗くなりがちなので、笑ったり、ときめいたりしてほしい	
G	1	真暗闇の世界	SNSで誹謗中傷を受けた主人公。周りの言葉に心を動かされ、前に進み、有名な(歌手や女優)になる物語。SNSでの誹謗中傷の数がかなり増えているから。	
G	2	日常って	新型コロナウイルスによって日常が180度変わってしまった。以前と比べ今の生活がまだ完全に戻っていないことを表現したい。	○
G	3	〇〇〇が消えたら	突如大きな地震が発生、ネット回線などあらゆるものがストップ。今の状態が当たり前ではないということを実感してほしい。	
H	1	この青空に、手のひらを	とある家系に生まれる子供は、20歳になると人を見つめるだけで殺せる能力が備わる。友情。生死の奇譚。死生観。	
H	2	どこにでもあるメルヘン	ある青年の中に潜む「第二人格」が、彼の知らぬ現実と心の闇を暴いていく。多重人格者の葛藤や悩み、心の成長を描く	○
H	3	Unlimited (仮)	トラウマを抱えた元天才レーサーが、現在は友人と特殊運送業の会社を立ち上げていた。失敗した人の立ち直り。会社の雰囲気。印象的な場所。挑戦する意義を伝える	
I	1	面(つら)	視覚を刺激するホラーが作りたい。	○
I	2	リベンジ	どんな存在でも失敗はするというところを、幽霊を代表として表現	
I	3	とらわれし者	誰かに何かをされるよりも自分で選んだ方が幸せだということがわかるように。	
J	1	変わる常識、変わらない日常	未だコロナが収束する気配の無いこの時代。家の中でもマスクをするのが当たり前という世界。親の本当の顔も知らない世代が増えていく。逆にキャスト全員がマスクをしている映像があっても良いんじゃないかと思って考えました	
J	2	僕の世界からキミがいなくなってくれない	なぜか主人公の行く先々に常にいる女性と恐ろしい秘密。恋愛モノに見せかけたホラー	○
K	1	青雉彼女	複数人の女性から一人を選ぶ。その中には友達彼女の彼女などの選んではいけない人も……。刺激がある恋愛アリティー	
K	2	admirer (フランス語: あこがれ)	趣味も特徴も特になく女の子がふいに見たアイドルのライブで心を動かされアイドルを目指す。夢を追いかけることの大切さや、そこで生まれる挫折、友情などからドラマが生まれると思った	
K	3	ナイン	やけに彼女の羽振りがいいと思いき、こっそり後をつける。パパ活！相手は自分の父親。パパ活は最近話題なので	

2-3 キャスティング

主演俳優は2名、主人公の圭介と幼馴染の

勇剛で、20代前半でキャスティングした。他に圭介の父親役と母親役、および子供の頃の圭介と勇剛役で2名の子役をキャスティングした。ピアノを弾くシーンがあるため、圭介役については大人役も子役も少しでもピアノが弾けることを条件とした。

2-4 ロケハン

シーン表を作成しロケ地の候補をリストアップした(表2)。本企画は音楽に関わるストーリーでピアノコンサートやピアノの練習シーンがあるため、実際の練習施設や音楽ホールの使用を検討した。リサーチの結果、最終的なロケ地として、札幌芸術の森アートホールのピアノ練習室、江別市大麻の江別市民文化ホール(えぼあほーる)、札幌市豊平区のレンタルスペース・メイプルリーフクラブ、札幌市北区のLIVE SPACE XYSA 象(Studio Riccio)をロケ地とした。カフェのシーンは札幌市豊平区の宮田屋珈琲に撮影許可を申請した。

表2 シーン表

S#	pp	設定日	シーン	INT/EXT	D/N	ロケ地
#01	0.6	イ	コンサートホールステージ	INT	D	大麻公民館・えぼあほーる
#02	0.8	□	圭介の家	INT	D	鳥谷部家
#03	0.2	□	圭介の家	INT	D	鳥谷部家
#04	0.4	□	道沿いのカフェ	EXT	D	宮田屋珈琲館
#05	0.8	□	大学実習室	INT	D	北海道情報大学 実習室
#06	2.3	□	喫茶店	INT	N	メイプルリーフクラブ
#07	0.3	□	コンサートホール廊下(回想)	INT	D	大麻公民館・えぼあほーる
#08	0.3	□	コンサートホールステージ(回想)	INT	N	大麻公民館・えぼあほーる
#09	0.7	□	コンサートホール廊下(回想)	INT	N	大麻公民館・えぼあほーる
#10	1.2	□	圭介の実家(回想)	INT	N	鳥谷部家
#11	0.4	□	喫茶店	INT	D	メイプルリーフクラブ
#12	0.5	□	圭介の家	EXT	N	鳥谷部家
#13	1.1	□	圭介の家(夢)	INT	N	鳥谷部家
#14	0.6	ハ	圭介の家	INT	D	鳥谷部家
#15	0.2	ハ	レンタルスタジオ(外観)	EXT	D	芸術の森
#16	2	ハ	レンタルスタジオ	INT	D	芸術の森
#17	1	ハ	圭介の家(夢)	INT	N	鳥谷部家
#18	0.3	二	圭介の家	INT	D	鳥谷部家
#19	0.5	二	レンタルスタジオ	INT	D	Studio Riccio
#20	1.5	二	レンタルスタジオ	INT	N	Studio Riccio
#21	0.8	ホ	レンタルスタジオ	INT	D	Studio Riccio
#22	1	ホ	喫茶店(柱6と同じ)	INT	D	メイプルリーフクラブ

2-5 美術

劇中の美術で最も調達が難しそうなのは、グランドピアノ(図1)やアップライトピアノをロケ先で確保できたため、美術部は衣装と小道具に専念することができた。主人公が大学内

で音楽サークルの練習風景を見るシーンの楽器(ギターやドラム、キーボードなど)は、本学の軽音楽部員の協力を得ることができた。衣装は劇中の設定日は5日間で、室内着や日常着、スーツなど比較的集めやすいものが多かった。美術・小道具がシンプルである分、寝室や玄関などの狭い空間やトラウマのシーンは演出部と相談しながら映像のイメージを作っていた。レファレンスとして短編映画『Lights Out』(2013)や『THE DOLLS with attitude』(2017)を参考にした。(図2・3)



図1 えぼあほーるのグランドピアノ



図2 短編映画『Lights Off』作品画像



図3 本作『音を掴む』玄関のシーン

3. 撮影

撮影日は 2023 年 1 月 28 日 (土) ~29 日 (日), 2 月 5 日 (日), 11 日 (土), 26 日 (日), の 5 日間の予定であった。しかしこの 5 日間で予定していた量を撮り切ることができなかったため, 追加撮影を 3 月 7 日 (火) に行った。全体では合計 6 日間の撮影を行った。

3-1 撮影 1・2 日目

撮影 1・2 日目は出演者は主人公の圭介一名のみで, 主に主人公の家である学生宅と大学で撮影した。今年もヘアメイクは札幌ビューティアート専門学校から有志の学生が 2 名参加してくれており, 寝起きのシーンや悪夢から汗をかいて目覚めるシーンなども効果的に撮影することができた。主人公の家では現実のパートと悪夢のシーンがあり, 夢の中の表現ではブルーフィルタの照明を使って色を区別している。大学では廊下の歩行シーンに移動撮影を取り入れた (図 4)。音のアフレコで G スタジオを利用するなど, 本学の施設を効果的に使用して撮影・収録を行った (図 5)。



図 4 大学の廊下での撮影



図 5 アフレコ風景

3-2 撮影 3 日目

3 日目は札幌のレンタルスペースで喫茶店のシーンから撮影した (図 6)。店舗には大きな窓があるが, 日中に夜のシーンを撮影するため, 室内側から窓を遮光して撮影した。午後からはレコーディングスタジオに移動して撮影した。しかし予定していた撮影を時間内に撮り切ることができなかったため, 追加撮影が確定した。



図 6 レンタルスペースでの撮影

3-3 振り返り会議

3 日目の撮影がスケジュール通りに終えられなかったことや, 撮影の段取りについて俳優部から不満と要望があったことから, 学生スタッフ全員で改善するための反省会を

行った。「なぜ撮り切れなかったか? なぜ (時間が) 押して行ったのか?」については計画の不備やコミュニケーションの問題もあったが, 全体としてチームの準備不足, 役割分担の不明確さがあったことが確認できた (表 3)。また, 「真剣さが感じられない」の項目について

は、監督のリーダーシップ不足や現場の雰囲気もあったが、大学外から俳優やスタッフに参加してもらっていることを意識したプロフェッショナルな態度を徹底するということが確認された（表 4）。この反省会は、この後撮影を円滑に行う上で重要な振り返りとなった。

表 3 「なぜ撮りきれなかったか」反省会議事録より

カテゴリー	反省点	改善策
撮影計画の不備	撮影計画が練られていない	撮影計画を事前にしっかりと練り、スケジュールを作成する
	撮影カットの順番を考えたのが遅すぎた	カット順を事前に決め、余裕を持たせる
	脚本が長すぎる、予算に見合っていない	脚本の長さを予算に合わせて調整
時間管理の問題	撮影が押して遅くなった	撮影前にタイムスケジュールを明確にし、撮影時間の目安を設定する
	一つの画面角を確定させるのに十数分かけていた	カットごとの所要時間を予測し、無駄な時間を減らす
	無駄な時間が多すぎる	時間管理の徹底
	撮影可能時間の把握の甘さ	
現場での準備不足	準備が整っていない、掛け声がな	撮影前に全員で準備確認を行い、掛け声や進行に統一感を持たせる
	い	
	番盤表に無理があった	番盤表を現実的に設定し、無理のない計画を立てる
コミュニケーションの問題	監督と演出に関するコミュニケーションがうまくできていなかった	監督と演出の役割分担を明確にし、定期的なコミュニケーションの時間を設ける
	指示や判断が素早い切らない	指示は具体的に、判断を迅速に行う
	監督にキャストを任せることが多かった	監督が全体の調整を行う
役割分担の不明確さ	それぞれが何をすべきかわからない	役割分担を事前にしっかりと確認し、チーム全員に具体的なタスクを伝える
	突然カットが増えるのは良くない	突然の変更は避け、事前に決定したカットを厳守

表 4 「真剣さが感じられない理由」反省会議事録より

カテゴリー	反省点	改善策
監督のリーダーシップ	監督があれこれ言いながら現場を行ったり来たりしていた	監督が冷静に現場を統率し、感情的にならないよう心掛ける
	その場しのぎの指示	指示は事前に計画し、明確に伝える
	指示の曖昧さ	OK宣言は確信を持って行う
	不安要素の残るOK宣言	
現場の雰囲気とテンポ	テンポの悪さ→脚本の把握が足りない	脚本を事前にしっかりと把握し、撮影時に流れを意識する
	毎年恒例行事だからやらなきゃ感	現場の雰囲気をチーム全体で共有し、一体感を持つ
	現場に一体感がなかった	内輪ノリを排除し、プロフェッショナルな態度を徹底する
	内輪ノリが目立った	
緊張感の不足	緊張感より焦りが勝っていた可能性があった	緊張感を持って臨むためのリハーサルやウォームアップを行う
	メリハリがついていなかった	メリハリをつけ、集中力を高める
	私語が多かった	私語を減らし、集中を促す
役割分担とスタッフの態度	スタッフとキャストはあくまで違うことをしているが、その線引きができていなかった	スタッフとキャストの役割を明確にし、尊重する態度を徹底する
	ゼミのノリでやってしまった	ゼミノリを避け、よりプロフェッショナルな雰囲気を作る
監督としての敬意の欠如	聴覚的に「監督」ではなく名前やあだ名で呼んでいた	「監督」としての敬意を持って接し、呼称を統一する

3-4 撮影 4 日目

4 日目は喫茶店と芸術の森のピアノ練習室での撮影を行った。最初のロケ地の札幌市豊平区から南区芸術の森へ移動を含むスケジュールで、俳優部・演出部は車で、その他のスタッフは地下鉄とバスを乗り継いで移動した。前回の撮影で俳優部のコミュニケーション不足が指摘されていたが、この日の撮影では俳優部には常時アテンダがあり、メイク場所の確保や駐車位置の指定、合流者への迎えのアテンダ、待機用のケータリング担当など、役割分担とスケジュールが細部まで練られていたため、制作の段取りは良好であった。屋外での撮影で雪が降るなど予想外のこともあったが、予定していたカットを撮り終えて終了した。

3-5 撮影 5 日目

5 日目は、コンサートホールのシーンと主人公の家のシーンを撮影した。コンサートホールでは最大時で俳優が 6 名（内 2 名は子役）参加したが、監督はテキパキと指示を出して撮影は順調に終了した（図 7）。主人公の家では玄関が狭く、音声や照明が入れる隙間がなかったため、シンプルなカット割りとなった。



図 7 演出指示をする廣瀬監督

3-6 撮影 6 日目（追加撮影分）

6 日目は、3 日目に撮りきれなかったレンタ

ルスペース部分と、レコーディングスタジオのシーンを撮影した。追加の日程であったため参加できるスタッフは減ったが、どちらのロケーションも一度撮影を行っているの、スタッフにイメージができており円滑に行うことができた。

4. ポストプロダクション

4-1 編集

編集は DaVinci Resolve を使用し、部分的な音編集に Adobe Premiere Pro を使用した。ラストシーンのサンプリング音楽の表現は、映像で音の要素をマルチスクリーンでリズムカルに見せていく構成とした。レファレンスとして『HIT SONGS OF 2014 –PERFORMED WITH HOUSEHOLD ITEMS』（2014）や『Music without Instruments -Household items only!』（2018）などを参考とした（図 8・9）。



図 8 『HIT SONGS OF 2014 –PERFORMED WITH HOUSEHOLD ITEMS』



図 9 本作『音を摘む』のサンプリング音楽シーン

4-2 MA

MA では特に現実のシーンと夢のシーンを対比的に仕上げていった。演奏シーンでの使用音源と演奏は同期していなかったため、MA と映像編集の両方でタイミングの調整を行った。

4-3 作品情報

完成作品の情報は以下の通りである（表 5）。

表 5 作品情報

作品名	音を摘む
長さ	19 分 31 秒
フォーマット	FHD 23.976 fps カラー
ジャンル	フィクション
完成年	2023 年
あらすじ	高いピアノの才能を持つ主人公 圭介は幼いころに父親から受けた精神的虐待でピアノから距離を置く生活を送っていた。そんな中、幼馴染の勇剛から着信が入る。
主演	藤川遥輝, 齋藤海地, 神田正貴
エキストラ	平山晴花 高木清正 藤井銀河 山本りほ 斉藤司 鳥居聖士 筒井暉翔 佐藤礼哉 山寄結生 新井田翼
作品リンク	https://youtu.be/aURCgWreTFQ?si=GB_bWm6O6H47dqMs



図 10 作品画像

エンディングのスタッフクレジットは以下の通りである（表 6）。

表 6 スタッフクレジット(括弧内は制作当時の学年)

監督	廣瀬崇人(3)
脚本	長嶋康平(3)
助監督	上村琢磨(3) 近侑一朗(2) 横山拓海(2)
プロデューサー	山田梓 (3)
アシスタントプロデューサー	古田逸晟(3) 鈴鹿萌笑(3)
エグゼクティブ・プロデューサー	島田英二
撮影監督	長嶋康平
撮影助手	長辰彌(3) 鶴田寛也(4)
録音	古田逸晟(3)
録音助手	田邊智惇(3)
照明	福岡未緒(3) 西股ひかり(2)
美術監督	中澤昇平(2)
美術	春木啓汰(3) 長辰彌(3) 鈴鹿萌笑 上村琢磨 松田悠花(2)
美術協力	近侑一朗 富居大輔 中澤昇平 島田英二 春木啓汰 廣瀬崇人 長辰彌 山田梓 鳥谷部大陸
キャスティング	春木啓汰 長嶋康平 福岡未緒 三平希美(4)
制作	鈴鹿萌笑 中澤昇平 上村琢磨 春木啓汰 近侑一朗 長辰彌 松田悠花 西股ひかり 副島碩(2) 横山拓海 菊地颯斗(2) 星海輝(2) 三平希美 佐藤冴耶(1)
予告編制作	春木啓汰 中澤昇平
スチール ポスター	福岡未緒
タイトルロゴ	後藤百花
ヘアメイク	千葉詩音(札幌ビューティーアート専門学校) 本間悠華(札幌ビューティーアート専門学校)
MA	塚原義弘 (Studio Riccio)
編集	山田梓 古田逸晟
Color	長辰彌
車輛	上村琢磨 福岡未緒 長辰彌

	春木啓汰 長嶋康平 田邊智惇 小室大樹 島田英二 今荘健(4)
ロケ地協力	北海道情報大学 メイプルリーフクラブ キサ XYSA 象 Studio Riccio 宮田屋珈琲 豊平店 芸術の森美術館 えぼあホール 鳥谷部家
Special Thanks	Casting Office Egg 札幌ビューティーアート専門学校 株式会社ムービーイングワーク 佐野美樹 鳥谷部大陸 サツドラ 豊平 3 条店 ラウンドワンスタジアム 札幌北 21 条店 コープさっぽろ 野幌店

5. コンテスト応募と参加

作品は第 18 回札幌国際短編映画祭に応募した。2023 年は世界 97 の国と地域から 2,663 作品の応募があり, この中から 81 作品が上映された。本作『音を摘む』は北海道セレクション STUDENTS にプログラムされ上映された。



図 11 映画祭での上映会の様子



図 12 舞台挨拶（監督の廣瀬崇人（右））

6. おわりに

本プロジェクトは 2022 年 9 月～2023 年 3 月に実施したが、前年よりもさらに対面活動を行うことができ、制作しやすくなったと感じた。本プロジェクトにおいても、コロナ禍の中で使用してきたサービス（たとえば Miro）を使用した、本件ではむしろ全員でアクセスしたり投票したりするなどのアクティブ・ラーニング要素として貢献した。撮影時の感染防止策も、定期的な換気や検温、手指消毒やマスク着用等、最低限の内容で対応できた。また本作のラストシーンには複数の映像が映し出されていくマルチスクリーンのアイデアが表現されているが、これにはこの時代の学生がコロナ禍の中で体験してきた ZOOM Meeting などのビデオ会議のギャラリー表示の経験が影響したのかもしれないと考えている。一方で、マルチスクリーンをアイデアに採用すると、表現の自由度が非常に高く、難しさにも直面した。そのため本プロジェクトではラストシーンの編集作業に長い時間を要した。

本プロジェクトは 2020 年度（コロナ禍の最初期）に入学した学生の 3 年生時の映像制作プロジェクトとなった。大学に入学してから長い間オンライン授業が続き、1 年生のときには対面授業がほとんどなかった世代だが、撮

影が始まって準備不足の問題が発生しても、問題解決のために皆で集まり、反省し改善して対応することができた。また映画祭に参加した際には、他大学の映像制作者と話す機会が生まれ、新しい仲間と交流しその後の活動範囲を拓ける経験ができた。また、本プロジェクトには例年よりも 1・2 年生の参加が多かった（8 名）のも特徴であった。本プロジェクトは下の学年の学生たちにとっても、コロナ禍の直後に待ちに待った本格的な映像制作に参加できる貴重な機会であったのかもしれない。大学で学んだ知識やスキルを、学外や社会へ応用していく実践的な機会として、今後もますますオープンに取り組んでいきたい。

謝辞

本プロジェクトは実践にあたり本学から多大な援助を頂いた。心より感謝いたします。

参考文献

- Andrew Huang (2014), 『HIT SONGS OF 2014 - PERFORMED WITH HOUSEHOLD ITEMS』, https://youtu.be/Svg_floHij8?si=dc9kel8TeJP4PgA5, (2025 年 4 月 25 日アクセス)。
- David F. Sandberg (監督) (2013), 『Lights Out』 (スウェーデン/短編映画/3 分) (2025 年 4 月 25 日アクセス)。
- JRinne Films (2014), 『Making Music with STUFF FROM KITCHEN』, <https://youtu.be/fOCaNBGMMgE?si=-nBs8Qi24wCAfj9y>, (2025 年 4 月 25 日アクセス)。
- Nans Sq (2011), 『楽器を使わずに音楽を作成する Creating music without musical instruments Maybe!』, https://youtu.be/q6X2410UPGc?si=e0_sJO6XF1PD8tHD, (2025 年 4 月 25 日アクセス)。
- Shonenjump_official (2016), 『TONE-CUTS GROOVE PROJECT -リアルとんかつ DJ アゲ太郎-』, <https://youtu.be/5PZth4VywS>

Y?si=J0T5WKbugdh8x2g5,

(2025 年 4 月 25 日アクセス)。

Teimi Schnierl (2018) , 『Music without

Instruments - Household items only! 』 ,

[https://youtu.be/hgk8akov3vE?si=vg-ci6ews](https://youtu.be/hgk8akov3vE?si=vg-ci6ewsDPQcsVB)

DPQcsVB, (2025 年 4 月 25 日アクセス)。

山口直哉 (脚本・監督) (2017) , 『THE DOLLS

with attitude』(日本/短編映画/6 分 37 秒),

[https://youtu.be/u-rCfjbHVMg?si=qxQePqB](https://youtu.be/u-rCfjbHVMg?si=qxQePqBSoJ9n5A2G)

SoJ9n5A2G,

(2025 年 4 月 25 日アクセス)。